



2025年8月発行

## NALC Holland Newsletter vol.17



皆様いかがお過ごしでしょうか。6月終わりから7月初めにかけて暑い日が続きました。体調を崩さないよう気を付けてください。

6月にSlot Loevesteinに行ってきました。このお城に肖像画のHugo de Grootが幽閉され、奥さんの協力で本の箱に入り、1621年3月22日、対岸の村のお祭りを利用して脱出、パリに逃れました。

彼の有名な著作には『自由海法について』（Mare Liberum）と『戦争と平和の法について』1625年著（De jure Belli ac Pacis）があり、国際法の創始者の一人とみなされています。幽閉されていたLovestein城から脱出が成功した後、平和に関する国際法に貢献できてよかったと思います。

現在においてもウクライナ、パレスティナなど国際間で戦争があり、平和の尊さを感じます。皆で共存できる助け合える平和な世界を望みます。

NALC Holland 代表 岩崎国治



## シニア交流会について

大塚千恵子

Amstelveen市Bovenkerk地区にある高齢者施設Zonnehuisにて、2023年3月に初のシニア交流会を行ってから2年が過ぎました。2021年夏にNALC役員の皆さんに日本人とオランダ人の交流を目的とした「シニア交流会」企画をプレゼンし、当初はNEMO茶房にて交流会を行っていましたが、思うように人が集まらず頭を悩ませておりましたところ、JWCさんより、Zonnehuisの日本人入居者のために時々訪問できる方（団体）を探しているというお話を頂きました。そのお話がきっかけでZonnehuisの施設担当者の方と打ち合わせし、日本人入居者の方だけでなく、オランダ人入居者も対象にしたイベントを2か月に1度一緒に企画してみようとなり、現在の活動に至っています。

最初の年は始動したばかりということもあり、茶話会、折り紙などお試しも兼ねたシンプルな企画でしたが、その翌年からはNALC役員・会員の皆さまのご協力のおかげでシニア交流会企画も軌道に乗り始め、施設担当者、入居者の方々にもその認知度が高まり、河南さんを中心にちぎり絵やお習字など、道具が必要となるもう少しグレードアップした企画が行えるようになりました。毎回10人前後の高齢者の方と一緒に各活動を行っております。

2024年の夏には、施設で数日間に渡るアジアをテーマにした大型イベントが開催されましたが、NALCメンバーだけでなく、JWCのメンバーの方のご協力もあり、日本人団体が一丸となり、盆踊りや茶道デモで参加、施設の皆さまに大変喜んで頂く活動ができました。休暇に出かけることができない入居者の方たちに「日本」を感じて頂ける貴

重な交流会になったと思います。また、メディア取材もあり、NALC会長の岩崎さんが代表としてローカル局（RTV Noord Holland）のインタビューに答えてくださり、NALCの活動をオランダで幅広く広報できる機会にもなりました。



昨年よりJACOP（Japanese Communities Platform）にも活動内容がAmstelveen市の地域貢献に役立っていると評価頂き、1回の活動につき30ユーロの助成金を頂けるようになり、活動の幅も広げることができるようになりました。

JACOPからの助成金のおかげもあり、2025年の活動は既に3回終了していますが、1月は卵の殻を使ったひな人形作り、3月は音楽家川合先生をゲストにお迎えした音楽セラピーワークショップ、5月はNALC会員でアートで専門の親松恵子さんによる陶芸ワークショップという他団体ではなかなかできないような交流企画が続きました。

今年は残り3回（7月22日、9月23日、11月25日）シニア交流会を予定していますが、今までお手伝い頂いた方、初めての方、皆さま大歓迎です。

施設の高齢者の皆さんはとてもチャームングで明るく、優しく接して下さるので、ボランティアの私共が逆に癒されることも多く、いつも楽しい時間を過ごさせて頂いております。是非そのような素敵な交流会に一人でも多くの方にご参加頂ければ嬉しいです。



## 訪問看護・介護 ほっとニュース (2/2)

葉子

前回の2025年新年号からの続きです。

### 【前回のお話しのおさらい】

88歳のワーナーさん（仮名）は一人暮らしで、夫を亡くした後、地域との交流を楽しんでいましたが、加齢による痛みや友人の死去により外出が減り、孤立。心身の衰えが進んだため、訪問看護チームが支援を開始。弟夫婦のもとでの一時的なケアも経て、再び自立生活を送れるまでに回復しました。現在は週1回の訪問支援を受けつつ、孤独や外出できないことへの不満が課題となっています。

\*\*\*

88歳の一人暮らしのMw. ワーナーさん（仮名）は、精神的な落ち込みや物忘れが目立つようになり、POH（家庭医のもとで働く専門看護師）が気付いたときには自分のことがほとんど何もできない状態になってしまっていました。

私たちが毎日の訪問介護を提供すると同時に、自立に向けた支援を続け、半年でほぼ自立生活ができるまで回復しました。しかし持病の腰痛の訴えはひどくなり、社会的孤立・孤独感から来る訴えをしょっちゅう口にするようになりました。それで、私たちはさらなる解決策を模索することになりました。

この精神的な抑うつ感、欲求不満に耳を傾けながら気晴らしになることや解決策を模索するのも、訪問看護師たちの仕事。本人が地域で自立生活を続けるには全人的ケアが欠かせないのです。

ケースマネージャーの役割とも重複しますが、クライアントさんの事情は私たちの

ほうがよく知っています。解決策として、村にある「軽度認知症及び一人暮らしの高齢者」を対象として出会いとアクティビティを提供する“Odensehuis”への参加を推奨・提案。乗り気を出してくれて、彼女は週1回数時間通っています。それでも「時には外に出て買い物くらいしたい」という希望はそこでは叶えられません。

地元のボランティア団体に何度も連絡してみましたがボランティア不足。やっとある人を見つけてもらいましたが、その人はまだ運転はできるものの、すでに85歳ほどの方。多くは望めませんでした。

それならばと、この数年間マーケティング拡大をしいる「在宅指導組織」の介入を試みようとなりました（註

：thuisbegeleiding、有料ボランティア的な要素があり、クライアントの自立を維持するために支援を行う。看護・介護、清掃（Huishouding）以外のサービスをクライアントの要望に合わせて提供）。

ところが金銭的な問題が浮かび上がってきました。そこで軽い認知症を患う彼女が政府から援助を受けられるよう、ケースマネージャーと家庭医にWLZ（Wet Langdurige zorg）の申請をしてもらいました。CIZ（要介護度を診断する機関）の職員がインタビューに訪れ、ワーナーさんの自立度を確認します。ケースマネージャーさん、弟さん夫婦、訪問看護師が立ち会っています。その重要な場で「物忘れが酷いし、腰の痛みも激しいので、毎日の生活に困ってる」などと訴えてくれればよかったのですが、「今のところ何とか自分でできていますわ。食事サービスを使っている



## 訪問看護・介護 ほっとニュース (2/2)

葉子

し、買い物は上のお隣さんが必要な時だけはやってくれている。物忘れもありますが、そんなにひどくはありません。外に出られないのは悲しいですが、歳を取ればお友達も減るから、仕方ない」といった回答をしたのでした。

お判りでしょうか？この回答では要介護認定は受けられません。“有料ボランティア的在宅指導組織”を雇うという話はこれで没。じゃ、どうしたらたまに外に出るような機会を得られるか。ケースマネージャーさんも私たちも、もう打つ手はなしと思いつつ、「ああ、外に出られたら…」「腰が痛くて…」と訴えられ続けていると、何かほかに手はないものかとまた思ってしまうのでした。

そして、ついに「De Zonnebloem」であるボランティアさんが見つかったのです。

このボランティアさんは定年退職してすぐの方で、ワーナーさんと初対面で意気投合。2週間に1度ほどの割合で訪問してくれ、たまには車も出してくれると言うので、私たちも「ホッと」したというお話しでした。

これで彼女の毎日に楽しみが出来ましたね。腰痛の訴えも減るかもしれませんよ。

Buurtzorg Doorwerth team 2

訪問看護師 ヨウコ (2025年1月15日記)

